

主への感謝のささげ物

ヨハネ福音書12:1-11

【新改訳 2017】

- 12:1 さて、イエスは過越の祭りの六日前にベタニアに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。
- 12:2 人々はイエスのために、そこに夕食を用意した。マルタは給仕し、ラザロは、イエスとともに食卓に着いていた人たちの中にいた。
- 12:3 一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一トラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。
- 12:4 弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。
- 12:5 「どうして、この香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」
- 12:6 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。
- 12:7 イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。
- 12:8 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいますが、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。」
- 12:9 すると、大勢のユダヤ人の群衆が、そこにイエスがおられると知って、やって来た。イエスに会うためだけではなく、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。
- 12:10 祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。
- 12:11 彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。

【祈りながら考えよう】

- (1) 自らを危険にさらすことになるのに、なぜ主イエスはベタニアに来られたのですか。
- (2) マリアが非常に高価な、純粋なナルドの香油をイエスに注いだ動機は何ですか。
- (3) 十二弟子にも選ばれたユダが、なぜ僅かばかりのお金でイエスを売り渡そうとしたのですか。

【解説】

(1) 過越の祭りの六日前にベタニアに来られた

さて、イエスは過越の祭りの六日前にベタニアに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。(1節)

エルサレムは過越の祭りを迎えていた。ユダヤ、ガリラヤをはじめ各地から集まって来たユダヤ人で都は賑わっていた。

「ナザレのイエスは、この祭りに来るだろうか」「さあ、どうだろう。指導者たちが命を狙っているのだから」「いや、メシアであるなら、この過越にこそ、それを宣言するはずではないか」そんな会話が人々の間で交わされていた。

そのころイエスと弟子たちは、巡礼たちに交じってエリコからエルサレムに向かっていった。そして過越の祭りの六日前、安息日が始まった金曜の夕方ベタニアに到着したのである。

数週間ぶりに戻って来たイエスを、ベタニアの人々は歓迎した。死人の中からよみがえらされたラザロとその姉妹マルタとマリアが特に喜んだことは言うまでもない。

この聖句は、マタイ26章6-13節およびマルコ14章3-9節に記されているツアラアトに冒された人シモンの家において行われた、イエスに香油を注いだ婦人の出来事と同じであると考えられる。

(2) 主への感謝のささげ物

人々はイエスのために、そこに夕食を用意した。マルタは給仕し、ラザロは、イエスとともに食卓に着いていた人たちの中にいた。一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一トラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。(2-3節)

さっそく食事が用意された。マルタは、いつものようにこまめに給仕をした。ラザロはイエスの一行や他の人々と共に招かれた客として食卓に着いていた。

すると、そこへマルタの妹マリアが、非常に高価で、純粋なナルドの香油を一トラ(約三百グラム)を持って来

て、それを入れてあった石膏の壺を割り、主イエスの頭と言わず、体全体に、足まで注いだ。さらに、マリアは主イエスの御足に塗った香油を、自分の髪の毛でぬぐい始めた。これは極めて大胆な行動であった。

ナルドの香油三百グラムというのは、あとで経済通のイスカリオテ・ユダが三百デナリと評価しているように、大変高価なものであった。当時1デナリというのは、一人の労働者の1日の給料であった。三百デナリということは、ゆうに1年分の給料を意味する。一人の男の年俸である。

それくらい高価な香油を、惜しげもなく主イエスの御体に注いでしまった。しかも、御足に塗った香油は、自分の髪の毛をほどいてぬぐったのである。なんと思い切った行為だろう。当時、髪は女性の栄光であった。マリアは自分の栄光を主の足もとに置いたのだ。



(3) イスカリオテのユダ

突然の出来事に、人々は驚いた。壺の大きさからして、それが大変な量であること、また部屋いっぱい広がった香から大変高価なナルド油であることがすぐに分かった。

「すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。『何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。』そして、彼女を厳しく責めた。」(マルコ14:4-5)

つましい生活をしてきた弟子たちのもったいないという思いは、やがて憤慨に変わった。

「どうしてこんなことをするのか」「なぜ、この香油を売って、貧しい人たちに施さなかったのか」

「弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。

『どうして、この香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。』(4-5節)

とりわけ厳しい態度をとったのは、ヨハネ福音書によればイスカリオテのユダであった。

ヨハネは彼のことを「イエスを裏切ろうとしていた」と説明している。他の福音書を見ると、彼はすでにイエスを敵の手に売るために、お金をもらおうとしていた。ヨハネは彼の本当の動機を見抜いて、こう記している。

「彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。」(6節)

このことから教えられることは、人の言葉には、その裏に、それとは別の本当の意図が隠されていることがしばしばあるということだ。ことに、立派なことを言う人に気をつけなければならない。他の人を批判したり、裁いたりする人に気をつけなければならない。

イスカリオテ・ユダは確かに立派なことを言った。しかし、1つとして立派なことをしてはいなかった。彼が貧しい人々を思いやっていたからではなく、一行の共同の財布の中身を彼が着用していたのである。

(4) わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです

イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいますが、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。」(7-8節)

マリアのしたことは突飛で、あまりにも大胆なため、人のひんしゆくを買うような行為であったが、彼女のした行為は、純粋な動機から出ていた。

なぜマリアはこのような行動を取ったのか。確かに三百デナリに売って、貧しい人に施すことは、決して悪いことではない。しかし、彼女がなりふり構わず、高価で、純粋なナルドの香油三百グラム全部を主イエスに注いでしまったのは、弟のラザロを生き返らせていただいたことへの感謝の気持ちであった。

彼女はそこにいる他の人がどう思うかとか、自分の行動を見て、人がはしたない女だと思わないだろうかなどは考えなかった。感謝の気持ちを素直に表したのである。信仰とはそういうものである。他の人がその間に介在するのは信仰ではない。信仰は、キリストと自分との関係である。

キリストへの感謝の気持ちを、どう表すかは、第三者がとやかく言うべき事柄ではない。マリアの精一杯の感謝の表現こそ、主が受け入れてくださったのである。

美しい言葉の影に隠れて、いやしい盗人に過ぎないイスカリオテ・ユダにならないように、私たち自身も気をつけなければならない。仮面をかぶり、自分をごまかし、神と人を欺いて生きてはならない。

たとい私たちは自分の弱さのために、多くの失敗をしたとしても、主に偽ることをしてはならない。主の御前に自分の弱さと罪とを認めて、それを告白し、赦しを求める者でありたい。

主イエスは、マリアの行為を容認なさった。それは、たといマリアがどれだけ主イエスの葬りについて自覚していたかは分からないが、彼女の行為が主イエスの葬りを象徴していたからである。当時、人が死ぬと香料を塗った。そして長い布を巻いて、洞穴の墓の中に葬った。マリアが主イエスの全身に香油を塗ったのは、それを示していたと主は言わ

れた。

この美しいマリアの行為は、主が十字架に付けられる前の最後の出来事となった。主は、マリアの精一杯の感謝を喜んで受け入れられた。

私たちは、自分が主によって新しいいのちを与えられ、今こうして生かされているということについて、一体どのような形で感謝を表しているか考えたい。

主はマリアのしたことを、「彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。」(マルコ14:8)と言われた。さらに主は

「世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう」
(マルコ14:8-9)

と語られた。この出来事は受難物語の序曲として語り継がれている。ベタニアの家いっばいに広がったかぐわしい献身の香りは、二千年にわたり、キリスト教会の隅々にまで届くことになった。

(5) 大勢の群衆がやって来た

すると、大勢のユダヤ人の群衆が、そこにイエスがおられると知って、やって来た。イエスに会うためだけではなく、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。(9節)

イエスがベタニアに来たことは、すぐにエルサレムに伝わった。知らせを聞いて、イエスと死人の中からよみがえらされたラザロを一目見ようとベタニアまでやって来る者たちもいた。

「やはり、イエスは来た」「イエスはメシアに違いない」日曜日の朝エルサレムの人々(その多くは巡礼であった)は、ベタニアに通じる門の周辺で、イエスの到着を待っていた。

(6) ラザロも殺そうと相談した

祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。(10-11節)

祭司長たちはラザロも殺害しようと相談した。なぜか。「ラザロのために多くのユダヤ人が……イエスを信じるようになったからである」。

ラザロはユダヤ教の権力層にとって敵となり、始末されなければならない存在となった。他の人を主イエスのもとに連れて来る者はこの世の人の迫害の標的となり、時には殉教の標的ともなる。

ある聖書注解者は、祭司長たちが復活を否定するサドカイ人であったため、ラザロを亡き者にして証拠隠滅を図ったのではないかと指摘する。

受難週の出来事

①金曜日—ベタニアに着く

ベタニアは、エルサレムから約3キロ離れた、オリーブ山の東斜面にある村。この村で、マリアはイエスの脚に高価な香油を注いだ。イエスはこの行為を埋葬の準備だと見なした。

②土曜日—休息の日

詳細は記されていないが、おそらくベタニアに住んでいた友人であるマルタ、マリア、ラザロとイエスは余暇を過ごしただろう。

③日曜日—勝利の入城

ろばに乗って、イエスはエルサレムに入城した。これはゼカリヤの預言を成就した(ゼカリヤ9:9)。群衆はしゅろの木の枝を振りながら、「ホサナ」と叫んで、イエスを王として歓迎した(マタイ21:1-11、マルコ11:1-11、ルカ19:28-44、ヨハネ12:12-16)。復活祭の前の日曜日に当たる、この日は「しゅろの日曜日」として知られている。

④月曜日—宮きよめ

神殿の外側の庭は異邦人が祈りを捧げることができる唯一の場所だったが、商人や両替商でいっぱいだった。イエスは憤りを覚え、彼らを追い出し、その台をひっくり返した(マタイ21:12-17、マルコ11:12-19、ルカ19:45-46)。

⑤—⑥火曜日と水曜日—最後の教え

聴く耳のあるすべての人々にイエスが教える最後の機会となった。特に世の終わりに、イエスが再び来ることを教えた(マタイ21:23-25:46、マルコ13:1-37、ルカ21:5-38)。

⑦木曜日—最後の晩餐とゲッセマネ

イエスは弟子たちの足を洗い、一緒に過越の食事をした。ユダがイエスを裏切るために、こっそり抜け出したのは、この時だった。一方、残りの弟子たちはゲッセマネに出かけた。そこでイエスは、ペテロがイエスを否定することを予告した(マタイ26:31-35、マルコ14:27-32、ルカ22:31-34)。

ゲッセマネでイエスは祈り、イエスを逮捕するために遣わされた人々を待った(マタイ26:36-56、マルコ14:32-52、ルカ22:39-53、ヨハネ18:1-14)。

